

●北海道地方環境事務所

〒060-0001 札幌市中央区北1条西10丁目1番地 ユーネットビル9F
TEL.011-251-8703 FAX.011-219-7072

支笏洞爺国立公園

Shikotsu-Toya National Park

日本の国立公園 6

支笏洞爺国立公園

国立公園に咲く花

イワブクロ (タルマエソウ)
Pentstemon frutescens



画・二橋愛次郎

標準和名はイワブクロだが、樽前山に多いことからついたタルマエソウの別名の方が広く知られている。火山の砂礫地が好きで、羊蹄山にも多い。花は長さ2.5cmほど、花弁には白い毛がまばらに生えている。

●支笏湖自然保護官事務所

〒066-0281 北海道千歳市支笏湖温泉
TEL: 0123-25-2350 FAX: 0123-25-2351

●洞爺湖自然保護官事務所

〒049-5602 北海道虻田郡洞爺湖町
TEL: 0142-76-4877 FAX: 0142-76-4876

●支笏湖ビジターセンター

〒066-0281 北海道千歳市支笏湖温泉
TEL: 0123-25-2404
<http://www15.ocn.ne.jp/~sikutuvc/>

●洞爺湖ビジターセンター

〒049-5721 北海道虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉 142番5
TEL: 0142-75-2555
<http://www.toyako-vc.jp>

●洞爺財田自然体験ハウス

〒049-5813 北海道虻田郡洞爺湖町財田 2-2
TEL: 0142-82-5999
<http://www18.ocn.ne.jp/~toya/>

生きている火山と静まる蒼い湖



火山は湖を生み、森を育て、 雄大な風景を作った。

日本は火山の多い国だ。

29ある国立公園の半分以上が、火山をその区域の中に持っている。

そして、日本の中でも、北海道は九州とともに巨大な噴火を起こした火山が多い。

この支笏洞爺国立公園は、火山が作った清澄な湖とそれを囲む森林、

いまでも活動を続け、地球の鼓動を伝える火山の景観を、主要な魅力としている。

各所に湧く豊かな温泉も、火山活動に伴うものだ。

戦後すぐの昭和24年(1949)に指定された。

札幌市中心部からも新千歳空港からも近い、アクセスのよい公園である。



羊蹄山エリア (羊蹄山) 「蝦夷富士」とも呼ばれる 秀麗な山容

富士山に似た秀麗な姿でそびえ立つ羊蹄山は、標高1893mあり、この国立公園の最高峰で、山頂部は高山植物に飾られる。

公園の西方に隣接するニセコエリアは、近年国際的なスキーリゾートとして発展している。



洞爺湖エリア 火山とともに生きる

洞爺湖は、支笏湖とは対照的に岸辺の平坦地に水田や畑地が多く、農村集落もあって、明るく穏やかな景観が広がっている。南岸には有珠山と昭和祈新山が並んでいる。



支笏洞爺国立公園



- 凡例
- 国立公園
 - 🔥 温泉
 - 🏠 ビジターセンター・博物館
 - 🏞️ 展望台

定山溪エリア (定山溪) 谷を飾る新緑と紅葉

定山溪温泉は、登別とともに日本を代表する温泉の一つに数えられる。豊平川に沿うこの一帯は、溪谷と秋の紅葉の美しさで知られ、空沼岳など後背の山々とともに札幌市民の憩いの場になっている。



支笏湖エリア 旅人を魅了する水の色

支笏湖は何よりもその澄みきった水の色が印象的だ。まわりを恵庭岳や風不死岳の深い緑に囲まれ、南岸には樽前山の溶岩ドームがアクセントをつけている。新千歳空港から約20kmの距離にありながら、この公園で最も自然性の高い地域である。



登別エリア 豊かな温泉の恵み

登別温泉は豊富な湯量と多様な泉質を持つ、日本を代表する温泉の一つである。背後には噴気を上げる日和山や地獄谷が、その東方には森に囲まれて透明度の高い倶多楽湖がある。



支笏洞爺国立公園のすがた

火山活動の博物館

ニセコアンヌプリ

羊蹄山 独立峰として整った姿が印象的だ。山体や火口に侵食による変形が少ないのは、比較的若い火山だからである。羊蹄山の噴出物は東方に広く分布している、かつては盛んな活動をしていたと考えられているが、歴史時代になってからの噴火の記録はない。

羊蹄山

支笏湖と周辺の三つの山 支笏湖は面積 77.3km² で日本第 8 位の湖沼である。支笏カルデラは、約 4 万年前に起こった巨大な噴火により生まれた。噴火の際に大量の軽石や火山灰を降らせ、火砕流は札幌市や羊蹄山付近にも達している。湖畔からの眺望で印象的な三つの山、風不死岳・恵庭岳・樽前山はカルデラが生まれた後に活動を始めた。樽前山は 9,000 年前に生まれた山で、よく目立つ溶岩ドームは明治 42 年（1909）の噴火によってできたものだ。近年では昭和 53 年（1978）に小規模な噴火を起こしている。



洞爺湖 洞爺湖は、面積 70.7km²、ほぼ円形で、支笏湖に次いで日本第 9 位の湖である。約 11 万年前の巨大な噴火により生まれた直径 8~11km のカルデラ湖で、噴火のとき発生した火砕流は太平洋と日本海に流れ込み、周辺に広い台地を作った。湖の中央にある中島は、洞爺カルデラができたあと、約 5 万年前に始まった火山活動で生まれた。密集した 7 個の溶岩ドームからできている。南岸の有珠山は、さらにその後、約 2 万年前に活動が始まったものである。

中島

有珠山

昭和新山

洞爺湖

火山が作り出した自然

北海道の火山を、いまは活動を止めたものも含めて地図に落とすと、火山の多い地域が帯状に結ばれる。千島列島から東北日本につながっているこのような火山の帯は、太平洋プレートが海溝に沈み込み、深いところからマグマを上昇させることによって生まれる。

北海道は、千島弧と東北日本弧という二つの弓形の列島の接点に当たり、火山の帯が大きく折れ曲がっている

あたりに位置するのが、支笏洞爺国立公園である。この国立公園では、有珠山や樽前山がいまも活発に活動し、大地の容貌を変化させている。また、過去の火山活動により生まれた支笏湖、洞爺湖、倶多楽湖という三つのカルデラ湖や豊かな温泉は、それぞれ特徴のある景観を作り、この国立公園の風景をダイナミックに変化に富んだものとしている。



倶多楽湖と登別 もう一つのカルデラ湖、倶多楽湖は数万年前の火山活動で形づくられた。支笏・洞爺両湖より小さく、直径 2km ほどである。登別の地獄谷や大湯沼などは、約 1 万年前の日和山の噴火活動によって生まれたものである。

有珠山は洞爺カルデラができたあと、およそ15～2万年前に生まれた火山である。噴火を繰り返し、7～8千年前には山頂部で大崩壊を起こし、岩なだれは噴火湾まで流れ込んだ。その後、長い休止の期間をおいて寛文3年（1663）に再び活動をはじめた。それから現在までに8回以上の噴火の記録があり、国立公園に指定されてからも、昭和52年（1977）と平成12年（2000）の2回、噴火している。

平成12年の噴火は有珠山西方山麓で発生し、温泉街に近い金比羅山などに新しく火口が開いた。このため国道が破壊されて通行不能になり、金比羅山からは熱水が噴き出し、泥流となって温泉街まで到達した。また、地面が70mも隆起するなどの地殻変動で家屋や道路・鉄道の損壊が多発した。噴火後に設置された散策道からは、い

まも水蒸気が立ち上る火口や、破壊された国道や家屋の遺構を見ることができる。このように、有珠山は日本で最も活動が活発な火山の一つである。

うそをつかない山

歴史時代の有珠山の噴火は、その前兆となる地震や地割れの発生、爆発的噴火に続く溶岩ドームの出現など、現象に規則性がある。このため、研究者は有珠山を「うそをつかない山」と呼んでいる。有珠山周辺ではこれまで、噴火予知をめざした火山活動の観測や研究が活発に展開され、また、災害時の被害を予測するハザードマップの作成や減災対策も進んでいる。平成12年の噴火では、噴火の前に緊急火山情報が発表され、住民1万6千名の避難が事前に的確に行われ、死傷者がなかった。

有珠山 今も続く活発な火山活動

洞爺湖周辺地域エコミュージアム 火山と共生するまちづくり

有珠山の直下にある洞爺湖温泉や壮瞥温泉は、明治43年（1910）の噴火後に温泉湧出が発見され、発展してきた街だ。その後3回の噴火を経験し、被害も被っている。

平成12年の噴火の後、洞爺湖町は泥流を逃がす流路工の整備や学校などの移転を行い、災害に強い町作りを進めた。また、同町と伊達市、壮瞥町、豊浦町は一体となって、災害の遺構を観光事業に活用したり、歴史や科学知識などを学び、火山に対する理解を深める学習活動を行ったりしている。そして、地域全体をエコミュージアム、つまり「自然の博物館」として整備し、地域振興に役立てようとする取組みを続けている。

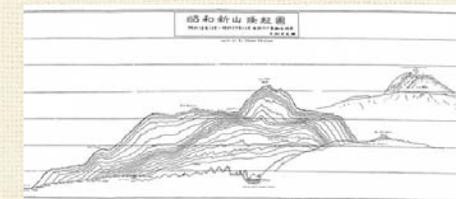
これほど多くの人々が住む地域が、活動の盛んな火山にこれほど近接している場所は、世界でも希であろう。ここに住む人々は、火山が作った美しい風景と温泉の恵みを楽しみ、火山の存在に積極的に向き合いながら生きている。まさに「火山と共生する」地域といえよう。



有珠山噴火（2000年）

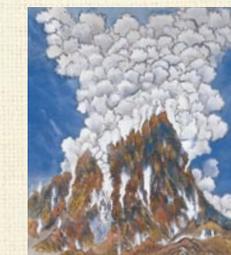
Column

昭和新山とミマツダイヤグラム



第2次大戦中の昭和18年（1943）12月、強い地震に始まった有珠山の活動は、同19～20年（1944～45）にかけて

山体東方の土地を隆起させ、標高407m（当時）の寄生火山・昭和山を作り出した。地元の郵便局長三松正夫（1888～1977）は、この間600日あまりにわたって地形変化などの観測を行い、くわしい記録を残した。特に、毎日の地盤の隆起と溶岩ドームが成長する状況を独自の方法で定点から記録した図は、戦後昭和23年（1948）の国際火山会議で発表され、火山成長の過程を記した世界最初の記録として「ミマツダイヤグラム」の名で有名になった。



画・三松正夫



昭和29年頃の昭和山

噴火する有珠山と洞爺湖温泉街（1977）

水のネットワーク

20mの水底が見える

支笏湖はこの公園のひとつの中心である。日本の湖沼の中で、トップレベルの透明度を誇る湖は、湖岸を森に囲まれ、濃紺の水を湛えて訪れる人を魅了している。

支笏湖の水がきれいなのは、水中のプランクトンが少なく、また湖岸を自然性の高い森林が囲み、水が濁る原因となる土砂の流入や落下が少ないからである。透明度は1960年代の平均で15～25m、近年はやや下がり、平

均15～20mで推移しているが、平成14年(2002)5月には、1カ所の測点で30.7mの記録がある。そのため、日本では数少ない淡水ダイビングスポットの一つとなっている。「支笏湖ブルー」の水質を守るため、支笏湖温泉地区では、宿泊施設などからの排水を湖の系外へ放流する公共下水道が整備されている。



原生林に囲まれたオコタンベ湖

ふきだし公園の湧水



羊蹄山の湧き水 すき間の多い溶岩などが積み重なっている火山は、雨や雪が地中にしみこみやすく、それが地下水となって山麓で湧き出す。羊蹄山の山麓には10カ所以上の湧水が知られているが、中でも北東山麓にある「羊蹄のふきだし湧水」は、湧水量1日8万トンに達するといわれ、日本の名水100選にも選ばれている。長い年月を地下水として流れ、いろいろな成分がとけ込んでいる湧水は、良質のミネラルウォーターである。遠くから容器を持って汲みに来る人も多い。



支笏湖水中散策



支笏湖のヒメマス

最北の不凍湖

支笏湖の水深は深く、最深363m、平均でも265mあり、ともに日本の湖沼では秋田県の田沢湖に次ぐ。深いため水量が多く、日本最大の琵琶湖(平均水深41.2m)と比べ、面積では約12%だが水量は約75%もある(水量も日本第2位)。対流のため表層の水温が下がりにくく、通常は真冬でも全面結氷しない。日本最北の不凍湖である。

ヒメマスの移入と増殖

ヒメマスはベニザケの陸封型で、北海道東部の阿寒湖とチミケップ湖が原産である。支笏湖には明治27年(1894)に阿寒湖から移入され、養殖に成功して、洞爺湖や十和田湖など、北海道や本州の多くの湖沼にも移殖された。なお、第2次大戦前には、魚体が小型化したため、千島の択捉島からベニザケの受精卵を移殖したこともある。釣りが解禁になる夏季には、湖面は多くの釣り人でにぎわう。

Column

支笏湖から千歳川とウトナイ湖を結ぶ水の流れ

支笏湖から流出する唯一の河川千歳川は、千歳市内から北に流れて石狩川に合流し、日本海に注ぐ。上流部は森林に囲まれて澄んだ流れがあり、サケが遡上してくる。ここにある農林水産省のサケマス孵化場では、水車を利用してサケを捕獲する「インディアン水車」がいまも使われている。

かつて太平洋に注いでいた石狩川は、4万年前の支笏火山の大噴火の際、火砕流によってせき止められ、北に流路を転じたと考えられている。

支笏カルデラ東部の山麓一帯は湧水地帯となっていて、そこを水源とする美々川が南に、ウトナイ湖を経て太平洋に注いでいる。



千歳内別湧水



多様な森



支笏湖畔に広がる混交林

支笏カルデラ外輪山の森

支笏湖を囲む山地は、豊かな森林に覆われている。林相は湖岸の低地ではエゾマツ・トドマツの針葉樹にミズナラやハルニレなどの広葉樹を交えた混交林が主体で、上部では針葉樹林に移行する。

噴火が早く終わった風不死岳はエゾマツ、トドマツなどの濃い緑に覆われているが、17世紀後半から現在まで噴火活動が続いている樽前山では、森林は標高約600m以下にしかない。

早春の林床植物

冬の長い北海道では、春が一度にやってくる。雪が消えるのを待ちきれないように、植物たちは一斉に目覚める。「春植物」と呼ばれる草は、木の葉が開くより早く、明るい林の中に次々に花を咲かせ、種子を結び、木の葉が開いて林内が暗くなる時期には地上部は消えてゆく。英語ではスプリング・エフェメラルという。「春のはかないもの」という意味である。成長期間が短い春植物は、芽が出てから花が咲くまでに時間のかかるものが多い。カタクリは8年、オオバノエンレイソウは十数年もかかる。

美笹の巨木林

支笏湖周辺の森は、昭和29年(1954)の台風で大きな被害を受けた。しかし、西岸の美笹周辺には、いまもハルニレ、カツラ、ミズナラ、シナノキ、センノキなど広葉樹の大木が多く、「巨木の森」と呼ばれている。



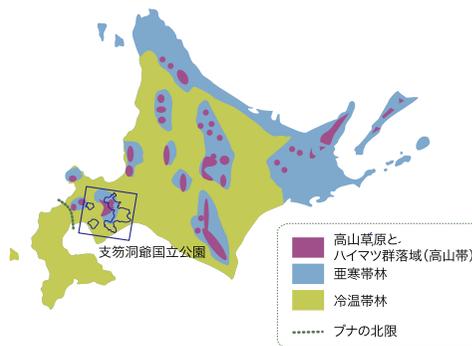
- 1 エゾエンゴサク
- 2 カタクリ
- 3 オオバノエンレイソウ
- 4 ニリンソウ
- 5 エンレイソウ
- 6 フクジュソウ



北と南の森林が交わる北海道

北海道では、南部の渡島半島までは本州以南に広く分布するブナ林が見られる。それより北ではブナ林はなくなるが、低地にはハルニレ、シナノキ、カツラ、カンバ類など本州の山地と共通する多くの広葉樹と、本州にはないエゾマツ、トドマツなどの針葉樹が生育する混交林が広く分布している。これは、北海道が気候的に冷温帯と亜寒帯の境い目にあり、両方の森林の植物が入り混じっているためである。このような森林の構成は、本州の森林よりも、むしろ北アメリカ東岸や沿海州の森林と似たところがある。

北海道の森林タイプ



苔の洞門

風不死岳の西麓にある。樽前山から流出した火山岩の割れ目が浸食されてできた狭い流れ谷で、深さ最大で約10m、幅3m、延長約400mである。両側の岩壁にエビゴケ、オオホウキゴケなど約30種類のコケが密生している。これは温度や湿度、日照条件などがコケの生育に適しているためで、成立には長い時間がかかっている。崩壊の危険があるため谷の内部には入れないが、入り口の観覧台から見学できる。

Column

噴火による自然の破壊と再生



樽前山(上)と風不死岳(下)の植生
火山活動が早く終わった風不死岳は、山頂部まで森林に覆われている。

火山の噴火は、周辺の森林に大きな影響を与える。火山灰や軽石が積もったり、火砕流に巻き込まれたところでは、樹木が枯死してしまう。火口付近では地温も高くなるので、被害はさらに大きくなる。植生の回復は地温の低下を待つ草やコケが生えるところから出発しなければならず、遷移が進んで森林が再び成り立つまでには長い時間がかかる。一方、火口より距離があり、かぶった噴出物が少なければ、植物は自力で再び芽を出し、森林は比較的短時間で元に近い状態に戻る。

いま、樽前山や有珠山の周辺では、噴火の影響の程度に応じて、回復の途中のさまざまな段階にある森林が見られる。



ヒグマは日本最大の陸生動物

支笏洞爺国立公園のすがた

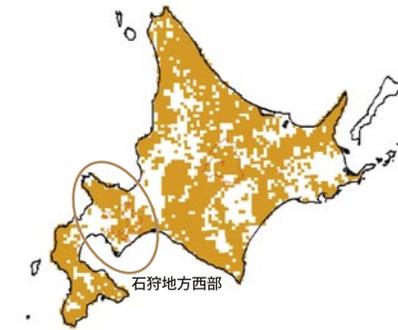
野生動物との共存

野生動物の重要なすみか



冬毛をまとったキツネ

北海道のヒグマの分布 (2000~2002年)



出典：環境省哺乳類分布調査

- 1 エゾフクロウ
- 2 キビタキ
- 3 クマゲラ
- 4 イカル
- 5 アカハラ



森にすむ鳥たち

自然林の広がる支笏湖周辺には森林性の鳥類が多く、新緑が鮮やかな初夏にはさわやかなさえずりが森に響く。冬の気候が厳しい北海道の森では、多くが夏鳥である。留鳥はアカゲラやクマゲラなどのキツツキ類、シジュウカラやハシトガラなどのカラ類、エゾライチョウが主なものだ。夏鳥はクロツグミ、アカハラ、キビタキ、ウグイス、アオジ、ツツドリなど、種類が多い。

国立公園は、生物の多様性をまもる場所として、大切な役割を担っている。豊かな森林に覆われたこの公園には、ヒグマをはじめ、エゾシカ、キツネ、ユキウサギ、エゾリス、エゾモモンガ、それにコウモリやネズミの仲間など、数多くの哺乳類が生息する。これらの中で、特にヒグマとエゾシカは、人との関係を考える上で重要な動物である。

ヒグマは日本最大の陸生動物であり、日本では北海道だけに生息している。かつては北海道全域に広く分布していたが、平野部の開発などにより生息地の縮小と分断が進んだ。特にこの公園を中心に生息する石狩地方西部のヒグマは、絶滅のおそれがあるとされている。

また、エゾシカは近年個体数が増加し、農林業の被害や交通事故などの問題が起り、国立公園でも植生に影響を与えるようになった。そのため、北海道はエゾシカの保護管理計画を定め、科学的知見に基づいた管理を進めている。

外来生物による影響

ペットや食用などの目的で輸入された外国産の動物が、逃げ出したり捨てられて野生化する例は多い。支笏洞爺国立公園周辺では、アメリカ北西部原産のアライグマが生息範囲を広げており、農作物被害や生態系への影響が問題になっている。また、在来種のニホンザリガニに被害を及ぼす恐れのあるアメリカ原産のウチダザリガニは、最近洞爺湖と支笏湖でも生息が確認された。ともに平成17年(2005)に制定された外来生物法によって移動や野外に放すことが禁止された。現在、野生化した個体の捕獲などの取り組みが進められている。



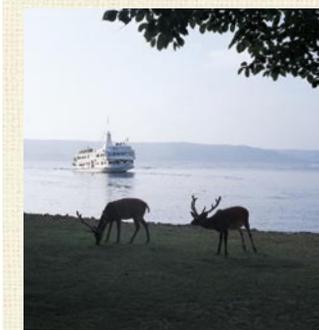
エゾモモンガ



捕獲されたアライグマ

Column

洞爺湖中島のエゾシカ



洞爺湖の中央にある中島では、昭和32年(1957)に持ち込まれた3頭のエゾシカが繁殖し、食害による森林の荒廃が進んだ。いま、中島の植生は、シカが食べない植物が優占している。シカは一時は300頭近くまで増え、餌不足による大量死も発生した。現在はほぼ150~200頭で推移しており、生態系のバランスを考える上で貴重な事例となっている。

中島は、周囲約10キロの隔離された島で、エゾシカの個体数や植生の変化などが把握しやすい。この環境を活かして、シカの密度と植生の変化や、シカが生きるのに必要な植物の量など、シカの保護管理のための基礎となる研究が進められている。

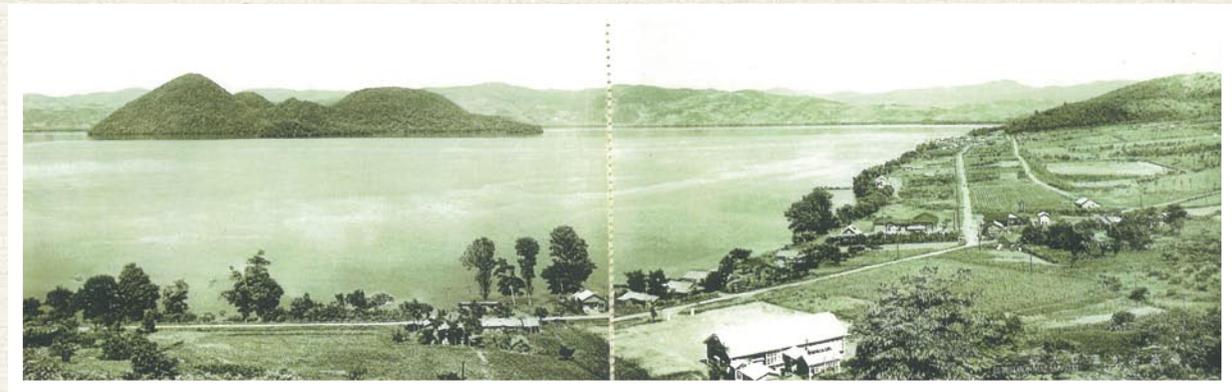
開発の歴史

支笏洞爺国立公園の周辺は、古くからアイヌ民族の生活の場であった。

江戸時代の中頃には、北海道南部に進出した松前藩が、支笏湖周辺の千歳、有珠、虻田などにアイヌ民族との交易の拠点を置いていた。

北海道開発が本格的にはじまったのは19世紀後半、明治政府が誕生してからのことだ。

この点で、北海道は本州以南とは大きく異なる道を歩んできた。



昭和の初め頃の洞爺湖畔の風景

松浦武四郎記念館提供(図と写真)

コラム ①

松浦武四郎の支笏湖発見

支笏湖を踏査し最初に記録に残したのは、松浦武四郎(文政元年～明治22年(1818～88))である。松浦武四郎は江戸時代末期に北海道やサハリンの調査に活躍した探検家で、安政4～5年(1857～58)に幕府の「東西蝦夷山川取調御用」として、北海道内陸部の状況を詳細に調べ、膨大な記録に残した。支笏湖については、安政4年に、千歳市から千歳川に沿って、山中を苦勞して湖畔に到達したことが「夕張日誌」に記されている。明治政府成立の後、武四郎は開拓判官に任ぜられ、北海道の名や国・郡名の選定を行った。



19世紀中頃、松浦武四郎が作成した東西蝦夷山川地理取調図(部分)中央は支笏湖

守屋憲治氏提供

森林と鉾山の開発

洞爺湖畔開発の歴史

この地方の開拓は、海岸沿いの平地から始まった。明治19年(1886)、全道を統括する北海道庁が札幌に置かれ、そのために洞爺湖を通して函館と札幌を結ぶ交通が盛んになり、明治20年(1887)に香川県から76名が現在の財田地区に入植するなど、湖岸の人口は次第に増加していった。

洞爺湖畔の観光事業に道が開けたのは、大正時代の初期に温泉が発見され、末期にこの地方を通して函館と札幌を結ぶ国鉄室蘭本線と千歳線が開通してからである。昭和4年(1929)には虻田(現JR洞爺)駅から洞爺湖畔まで鉄道(第二次大戦中に廃止)が開通し、ホテルやゴルフ場などが進出した。国立公園指定については、戦前に候補にあがったものの阿寒と大雪山に先行された。しかし、戦後になって札幌に近い利用性の良さが評価され、昭和24年に指定の運びとなった。そして、昭和30年代から40年代にかけて、高度経済成長期の観光旅行ブームとともに、洞爺湖畔は観光地としての発展を遂げたのである。



昭和29年頃の洞爺湖畔 珍小島付近

コラム ②

恵庭岳オリンピック競技場跡地の自然復元

昭和47年(1972)に開催された札幌冬季オリンピックで、恵庭岳はスキー滑降競技の会場とされた。コース設定のために国立公園の樹木を伐採することには議論があったが、競技後に施設を撤去して植樹し元の状態に戻すことを条件に認められ、全長2kmあまりの男女コースの他、ロープウェイや建物などが建設された。競技終了後すぐに原状回復の作業が始まり、昭和49年(1974)までに施設の撤去、植樹と合わせて急斜面の治山工事も実施された。また、その後も維持のための作業が長い時間をかけて行われた。現在、コースの痕跡はかなり薄れているが、植栽された樹木は周辺の木々に比べるとまだ小さい。



かつての美笛金山の専用鉄道(昭和11年から26年まで運行)

自然性の高い森林が残る支笏湖周辺であるが、国立公園指定以前には、鉾山開発などの産業活動が行われてきた歴史がある。国土の狭い日本では、国立公園の指定を進める際には、鉾業、発電などの産業との調整が大きな課題となることが多かった。日本の国立公園制度は、創設当初からいろいろな産業との調整を図りながら整備されてきたのである。

王子製紙(株)は苫小牧に工場を建設し、明治41年(1908)に苫小牧から支笏湖畔まで鉄道(山線)を建設し、千歳川に発電所を作り、支笏湖周辺の森林の伐採を行った。また、鉾山の開発も盛んで、支笏湖畔の美笛金山、登別市の幌別鉾山など、公園区域の内外にいくつかの鉾山があり、一部は公園指定後まで操業していた。現在は、公園内の鉾山はすべて廃止され、当時建設された鉄橋などは



千歳市の文化財に指定されている山線鉄橋

産業遺構として公園の景観の一部となっている。

北海道新聞社提供



札幌冬季オリンピック当時の恵庭岳滑降コース



ようこそ 支笏洞爺国立公園へ

国立公園に来たらず、ビジターセンターに立ち寄ってみたい。地域の自然や歴史の展示、スタッフの案内解説などを通じて、公園を楽しむための最新の情報が入手できる。さまざまな自然体験イベントやプログラムも行われている。

支笏洞爺国立公園では、環境省の施設として、支笏湖畔に支笏湖ビジターセンター、洞爺湖畔に洞爺湖ビジターセンターと洞爺財田自然体験ハウスがそれぞれ整備されている。そのほか公園の自然について学べる施設としては、火山科学館や洞爺湖森林博物館などもある。また、公園外のラムサール条約登録湿地ウトナイ湖にも野生鳥獣保護センターなどがある。

洞爺財田自然体験ハウス

洞爺湖の北岸、財田地区にあり、周辺の自然や動物の情報を展示している。敷地内にビオトープ池があり、水生生物の観察や環境整備などの活動を行っているほか、クラフト教室、ウォークラリーなど多くの行事を通じた自然体験の提供を行っている。また、近くの湖畔沿いには、1.5kmの遊歩道がある。



〒049-5813
北海道虻田郡洞爺湖町財田 2-2
tel 0142-82-5999
<http://www18.ocn.ne.jp/~toya/>



洞爺湖ビジターセンター

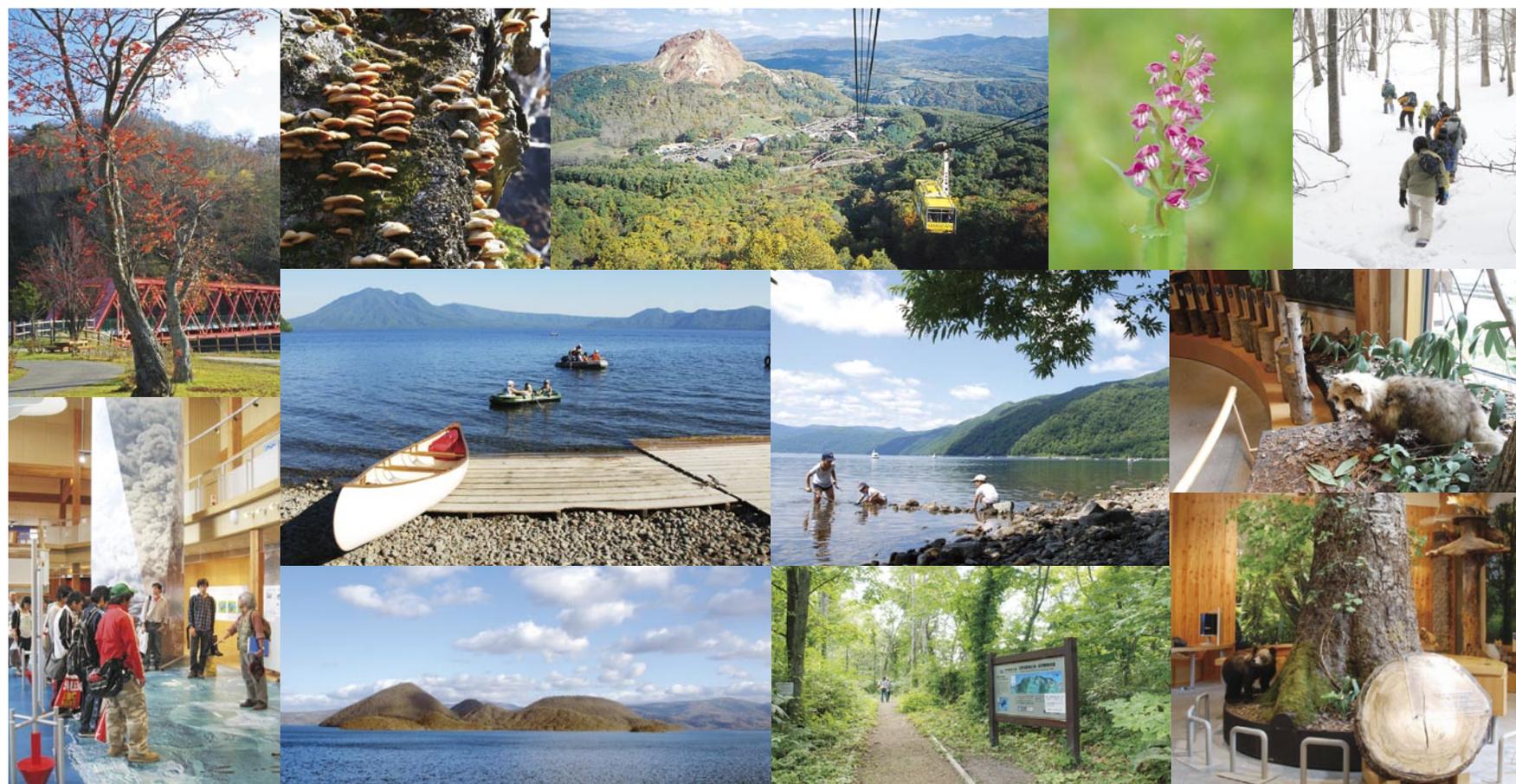
有珠山の麓、洞爺湖温泉にあるビジターセンター。平成19年(2007)に開館した。洞爺湖とその周辺の動植物や有珠山の火山活動などを展示紹介し、自然体験の情報基地となっている。火山科学館が併設されており、建物の南には、噴火で被災した施設がそのまま災害遺構として残されている。



〒049-5721 北海道虻田郡
洞爺湖町洞爺湖温泉 142 番 5
tel 0142-75-2555
<http://www.toyako-vc.jp>

火山科学館

有珠山の噴火と防災をテーマにした博物館。ビジターセンターとは通路でつながっている。3面マルチビジョン、体感ブースなどで2000年の噴火を体験できる。被災した自動車や鉄道レールなども展示されている。入館は有料。



支笏湖ビジターセンター

支笏湖温泉の南より、千歳川に近い湖畔にある。支笏湖の成り立ちや周辺の自然について展示紹介している。隣接する野鳥の森自然探勝路のガイドツアーや夜のスライド映写会なども行っている。



〒066-0281 千歳市支笏湖温泉
tel 0123-25-2404
<http://www15.ocn.ne.jp/~sikutuv/>

支笏湖野鳥の森

支笏湖温泉の南方、千歳川右岸の湖畔一帯約100haは支笏湖野鳥の森として、鳥類観察のための歩道や解説板などが整備されている。植生は広葉樹を主とし、常緑針葉樹も混生しており、四季を通じてキツツキ類、カラ類など多くの森林性の鳥類や湖上のカモ類を見ることができる。支笏湖ビジターセンターで野鳥などの最新情報が得られる。



自然を楽しむアクティビティ



登山・トレッキング



晩秋の羊蹄山（真狩側から）

羊蹄山 (1,893m)

どこからも目立つ美しい独立峰である。登るにつれて開ける展望を楽しみながらゆっくり登れば、高山の花たちが迎えてくれる。頂上には3つの火口がある。高い山なので、登るにはしっかりした装備と心構えが必要である。真狩登山口では、現在、登山者の拠点となる登山センターの建設が環境省によって進められている。完成後は、国立公園や羊蹄山の自然の紹介、登山の注意事項や安全情報の提供などが行われ、トイレ、シャワーも附設される。山麓には多くの湧水地がある。

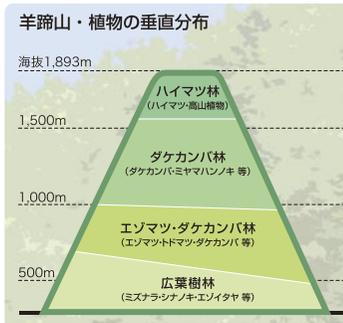


山頂部のお花畑



羊蹄山の植生の垂直分布

羊蹄山は独立峰であるため、標高による植物の変化がわかりやすい。山麓から標高650mまではハルニレ、ミズナラ、エゾイタヤなどの広葉樹林、その上1,000mまではエゾマツ、トドマツにダケカンバを交えた針葉樹林が広がっている。1,000m付近から1,600m付近まではダケカンバ帯で、上部にはハイマツも現れる。そして1,600m以上が高山帯となる。羊蹄山の高山植物はイワウメ、イワギキョウ、イワブクロ、エゾツガザクラ、キバナシャクナゲなど約260種もあり、独立峰のわりには種類が多い。



公園利用のルールとマナー

貴重な自然を後世にそのまま伝えるため、国立公園では自然を傷つけたり汚したりしないよう、ルールやマナーを守ることが求められる。主なものを挙げてみよう。どれも慣れれば簡単に身につくことばかりだ。

- ❶ 植物を守るため、歩道や木道を外れなくて歩く。
- ❷ ゴミは捨てずに家まで持ち帰る。
- ❸ 植物や石をとらない。とっていいのは写真だけ。
- ❹ 野生動物に顔をやらない。また、追いかけて無理に近寄らない。

有珠山 (733m)



山頂までロープウェイがある。山頂駅から火口原展望台や南外輪ルートを歩けば、過去の噴火の跡と、植物たちの回復の状況を見ることができる。昭和52年(1977)の噴火以前には、ここに牛馬が放牧されていたことを知れば、その変わりように驚かされる。



オロフレ山 (1,231m)



ミヤマオダマキ

洞爺湖と登別温泉の間にあるオロフレ山は、標高が低いにもかかわらず、高山植物が多く生育していることで知られる。登山口は道道の旧道に入ったオロフレ峠にある。途中にはシラネアオイの群落があり、また、7月にはイワヒゲ、チングルマ、ミヤマオダマキなど、数十種の花が咲くお花畑となる。



恵庭岳 (1,320m)



ノリウツギ

東麓のポロピナイに登山口がある。樹林内は見とおしがきかないが、稜線に出るとカルデラの外輪山が望める。なお、山頂付近は崩落のおそれがあるため、8合目以上は通行禁止になっている。



紋別岳 (866m)



シラネアオイ

支笏湖温泉の北側にある山。管理用の狭い車道をたどる。山頂からの支笏湖はもちろん、千歳市方面に広がる雄大な平原の眺望もすばらしい。



樽前山 (1,041m)



樽前山はまだ噴煙を上げている火山である。山頂までは車道の終点から1時間足らず。ドーム手前の東山から、広い火口原と溶岩ドームを間近に見ることができる。シラタマノキ、イソツツジ、イワブクロなどの植物も見られる。外輪山を一周することもできるが、火口内への立ち入りは危険なので禁止されている。



湖上探勝

船から見る風景は、陸上からとは視点が変わり、新鮮なものだ。支笏湖では4月から11月はじめまで、遊覧船が運航する。水中の景観を探勝するための水中観光船もある。洞爺湖は遊覧船が通年定期運航し、夏は中島に上陸できる。支笏湖と洞爺湖のキャンプ場周辺などでは、自然との一体感を楽しむカヌーの利用も増えてきている。



遊覧船（支笏湖モラップ付近）

自然を楽しむビューポイント

公園内をめぐる道路の沿線からは、湖水と森林のさまざまな表情が楽しめる。

支笏湖エリア

ポロピナイ支笏湖展望台：札幌市と支笏湖を結ぶ国道453号の支笏湖北岸にある。支笏湖と樽前山の展望台。

オコタンベ湖展望台：国道453号から分かれて美笛に抜ける道道沿いにある。恵庭岳の西に静まるオコタンベ湖の展望地点。

美笛峠展望台：支笏湖の西にある国道276号の展望台。樹海の先に支笏湖が姿を覗かせる。

定山溪エリア

豊平峡ダム展望台：ダムサイトの展望台から下流の豊平峡が見事である。

中山峠：札幌と洞爺湖を結ぶ国道230号にあり、羊蹄山や定山溪周辺の連山が一望できる。

洞爺湖エリア

観湖台（洞爺湖町）：洞爺湖北岸の国道の近くにある展望台。洞爺湖と有珠山、昭和南山が一望できる。

オロフレ峠（旧道）：標高930mあり、洞爺湖や羊蹄山、噴火湾が樹林越しに望める。



オコタンベ湖展望台



美笛峠展望台



豊平峡ダム展望台

釣り

北海道ではヒメマスを一般に「チップ」と呼ぶ。アイヌ語のカパチュエが詰まったものである。支笏湖に導入された経緯は別項(p11)にあるが、現在も支笏湖のチップ釣りは人気が高い。支笏湖の静穏な環境と水生植物をまもるため、動力船の乗り入れは許可制になっている。



チップ釣り

雪上の自然観察

スノーシューやクロスカンリースキーを履けば、動物の足跡を探したり、野鳥を観察したり、雪の上を自由に歩いて冬の自然を楽しめる。支笏湖ビジターセンターで、スノーシューハイキングなどを行っているほか、洞爺湖・有珠山周辺や羊蹄山麓でも民間会社がガイドツアーを行っている。

スキーリゾート・ニセコ

羊蹄山の北西方にはニセコ連峰があり、その北方の小樽周辺の海岸を合わせて国定公園に指定されている。ニセコアンヌプリを主峰として東西に延びる標高1,000~1,300mほどの山群である。北海道でも積雪量の多い地域で、ササ原の多いなだらかな地形と、気温が低く雪質の良いことから、スキー場としての評価が極めて高い。

近年は海外にまでその存在が知られ、特に季節が日本と逆で時差の少ないオーストラリアからのスキー客が増加している。山麓には温泉が多く、これらを基地とする登山も盛んである。



ニセコ東山スキー場

公園内のキャンプ場

キャンプは自然と身近に接するよい手段だ。公園内には要所にキャンプ場が整備されている。

支笏湖エリア

モラップ：公園内で最も歴史のあるキャンプ場。支笏湖畔で一番大きく、設備も整っている。

美笛：湖畔の林の中にあるモビレージ式キャンプ場。テントサイトまで車で入れる。**ポロピナイとオコタン**：ともに支笏湖北岸にある静かなサイト。

洞爺湖エリア

財田：自然体験ハウスに隣接している。一部オートキャンプにも対応している。**仲洞爺、滝の上**：湖の東岸に面した林の中にある。



モラップキャンプ場



ソウベツ川遊び（財田キャンプ場付近）

月浦（グリーンステイ洞爺湖）：湖畔のオートキャンプ場として整備されている。

羊蹄山エリア

真狩登山口、半月湖：主に登山者のベースとして使われていたが、近年はキャンプ自体を楽しむ利用も増えている。



ポロピナイキャンプ場

定山溪エリア

定山溪自然の村：豊平峡温泉の奥にある札幌市民の自然体験のための拠点施設。自然体験のプログラムも行われている。



日本には多くの温泉があるが、その分布はおおむね火山の分布と一致している。これは、温泉の多くが、地中にしみこんだ雨水が火山の地下にあるマグマの影響で温められたものだからである。ほかに数は少ないが火山とは結びつかない温泉もある。

温泉には、地中の地下水の分布や岩石の成分の違いによって、溶け込んでいる物質が異なり、単純泉（含有成分が少ないもの）、塩化物泉、硫黄泉、酸性泉など多くの泉質がある。温泉浴の効能も異なっている。

温泉の楽しみ [温泉は火山の恵み]



大湯沼川にある天然の足湯（登別温泉）

地獄谷の噴気（登別温泉）



Column

温泉の効用

温泉には、それに含まれる成分による療養・病氣予防の効果や、日常生活から解放されて自然環境の中に身を置くことによる精神的な効果など、さまざまな効用がある。日本人は全身浴槽に浸かり、ゆっくりと暖まるのを好み、「風呂好き民族」といわれる。温泉利用の歴史も古く、8世紀に成立した日本最古の歴史書・古事記に、すでに温泉に関する記述がある。

また、温泉は温泉浴だけでなく、いろいろなことに使われている。直接、熱源として動植物の飼育や栽培に利用するだけでなく、ヒートポンプによって排湯から熱を取りだし、施設の暖房に使用することもできる。壮瞥町では農家が温泉を利用して、大型ハウスでトマトの栽培を行っている。

主な温泉と見どころ案内



定山溪温泉



丸駒温泉

洞爺湖温泉

炭酸水素塩泉、硫酸塩泉 支笏湖温泉

支笏湖畔唯一の集落である。公園指定後に計画的に整備されたため、施設が樹林に溶け込んで落ち着いたたたずまいを作っている。温泉は昭和49年（1974）にボーリングによって湧出したもので、泉質は炭酸水素塩泉である。支笏湖野鳥の森（→p19）が近い。近くの千歳川にかかる赤い鉄橋は、かつてあった苦小牧からの王子製紙会社専用鉄道（山線）のもので、北海道に残る最古の鉄橋である。なお、支笏湖北岸にはほかに、丸駒温泉という温泉がある。泉質はともに炭酸水素塩泉、硫酸塩泉。



支笏湖温泉

いろいろな泉質 登別温泉

日本の代表的な温泉地の一つ。アイヌ民族に古くから知られ、江戸時代末期には函館に詰めていた役人なども湯治に使っていた。1日1万トンを超える湯量と、硫黄泉、硫化水素泉、含鉄泉など11もの泉質を持ち、いろいろな泉質を楽しめる。

そのため、さまざまな温泉療養の研究が、近代医学の立場から行われてきた場所でもある。

温泉街の近くには、いまま激しく火山ガスや熱湯を噴出している地獄谷や大湯沼がある。大湯沼から流れる川沿いにベンチがあり、天然の足湯が楽しめる。

塩化物泉、炭酸水素塩泉 洞爺湖温泉

明治末の有珠山噴火で温泉が湧出し、湖畔の温泉街として発展してきた。有珠山と共に生きる町づくりを積極的に進めている（→p8-9）。泉質は塩化物泉、炭酸水素塩泉。十数カ所に手湯、足湯の設備がある。また、西山火山口や金比羅火山口の遊歩道を歩けば平成12年（2000）噴火の爪あとを間近に観察できる。



塩化物泉 定山溪温泉

温泉街を形成する規模の大きな温泉で、豊富な湯量を持つ塩化物泉である。

慶応2年（1866）に岡山の僧、定山によって発見された。札幌市の郊外にあり、市民の休養の場として古くから親しまれている。温泉の上手には、豊平川に沿って2.5kmの遊歩道がある。



硫黄泉

北湯沢温泉

洞爺湖の東方、長流川に面した温泉で、泉質は硫黄泉である。温泉から溪流沿いに遊歩道があり、温水のせせらぎを素足で歩行できる足湯がある。また、近くにスキー場もある。

ラジウム

カルルス温泉

登別の約8km北方にある硫酸塩泉。昭和32年（1957）に北海道で最初に指定された国民保養温泉地で、いまま湯治場の雰囲気を残す。カルルスという名前は、ラジウムを含有する泉質がチェコの名湯カルルスバード（現カルロヴィ・ヴァリ）に似ているため。

まつりとイベント



昭和新年雪合戦

雪玉をぶつけ合う単純な遊びをルール化した。年々参加チームが増加し、最近ではフィンランドでヨーロッパ選手権が開かれるまでになっている。



支笏湖水濤まつり

住民手づくりのまつりから千歳市を代表するイベントに成長した。湖畔に多数の氷像が立ち並び、夜はライトアップされて幻想的な雰囲気を醸し出す。



登別地獄まつり

年に一度、地獄谷の地獄の釜のふたが開き、閻魔大王が大勢の鬼たちを従えて現れる。閻魔大王の山車や鬼御輿が温泉街に繰り出す陽気なまつり。

国立公園のプロフィール

国土の7割が森林に覆われ、亜寒帯から亜熱帯まで多様な環境や動植物に恵まれた日本列島。豊かで美しい日本の自然を代表する地域が国立公園である。

日本の国立公園は1931年の制度創設以来、70年余りの歴史を有している。現在、全国で北海道から琉球列島まで、29の国立公園が指定されており、国土の陸域面積の5パーセントを占めている。全国の代表的な自然環境をカバーする国立公園は、自然環境と生物多様性を保

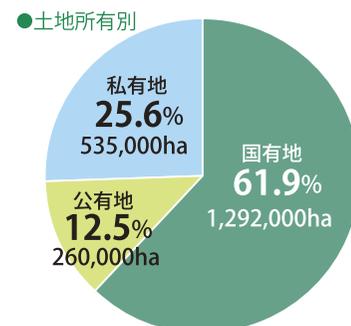
全する日本の保護地域システムの骨格を担っている。

日本の国立公園には、原生的な森林や湿原だけでなく、人と自然の関わりを通じて形成された農耕地や集落周辺の自然、また歴史的、文化的景観も含まれている。さまざまなレクリエーションや観光、教育活動などに利用することも目的としており、地域社会との共存を重視している。

日本の国立公園は、土地所有にかかわらず指定される。公園内の国有地も、多くは公園以外の目的で管理されている。このため、土地所有者を始めさまざまな関係者と産業活動や土地利用の調整を図りながら、自然資源の保護と持続的な利用を両立させていくことが日本の国立公園管理の基本となっている。

国立公園の管理はゾーニングにもとづいて実施されている。公園区域は、自然環境や景観の特性に応じて、最も厳格に保護される特別保護地区、公園区域の主体をなす特別地域、そして緩衝地域としての普通地域の3つのゾーンに区分されていて、樹木の伐採や建設工事など景観に影響を及ぼすような活動は、許可または届出の対象となっている。

国立公園の実地の管理は、環境省の地方環境事務所が地方公共団体などの協力を得ながら実施している。各公園には自然保護官が配置され、開発行為との調整、利用施設の整備、普及啓発・インタープリテーション、自然環境のモニタリングなどの業務に携わっている。



日本の国立公園

- | | |
|------------|-----------|
| 1 利尻礼文サロベツ | 19 伊勢志摩 |
| 2 知床 | 20 吉野熊野 |
| 3 阿寒 | 21 山陰海岸 |
| 4 釧路湿原 | 22 瀬戸内海 |
| 5 大雪山 | 23 大山隠岐 |
| 6 支笏洞爺 | 24 足摺宇和海 |
| 7 十和田八幡平 | 25 西海 |
| 8 陸中海岸 | 26 雲仙天草 |
| 9 磐梯朝日 | 27 阿蘇くじゅう |
| 10 日光 | 28 霧島屋久 |
| 11 尾瀬 | 29 西表石垣 |
| 12 上信越高原 | |
| 13 秩父多摩甲斐 | |
| 14 小笠原 | |
| 15 富士箱根伊豆 | |
| 16 中部山岳 | |
| 17 白山 | |
| 18 南アルプス | |

北海道の国立公園

1 利尻礼文サロベツ

Rishiri-Rebun-Sarobetsu

指定年：1974.9.20 面積：24,166ha

日本最北の国立公園。洋上の孤立峰利尻島、固有の植物が見られる礼文島、そしてサロベツ川の河口に広がる広大なサロベツ湿原の三つのエリアから成り、変化に富んだ景観と動植物が特徴である。



2 知床

Shiretoko

指定年：1964.6.1 面積：38,633ha

北海道の東北部に突き出した知床半島の中央部から先端部が指定されている。定住人口はほとんどなく、海と陸が一体となった原始的な生態系が残されており、ヒグマ、オオワシ、トドなどの大型野生動物が息づく。平成17年(2005)に世界自然遺産地域に登録された。



3 阿寒

Akan

指定年：1934.12.4 面積：90,481ha

日本で最も歴史のある国立公園の一つ。トドマツ・エゾマツの原生林と、火山活動で形づくられた大小の湖が景観の基調となっている。北海道らしい自然の奥深さを感じさせる公園である。活動中の火山もあり、各所に温泉が湧出する。



4 釧路湿原

Kushiro-Shitsugen

指定年：1987.7.31 面積：26,861ha

昭和62年(1987)に指定された比較的新しい国立公園。釧路湿原は釧路川の流域に広がるスゲ類などの低層湿原を主体とした我が国最大の湿原で、タンチョウやイトワなど絶滅のおそれのある野生動物の貴重な生息地でもある。昭和55年(1980)に我が国で最初のラムサール条約の登録湿地となった。



5 大雪山

Daisetsuzan

指定年：1934.12.4 面積：226,764ha

22万6千ヘクタールの日本最大の国立公園。北海道の屋根となっている2000m級の山並みが連なり、山上には高山植物の大群落が広がっている原始性の高い公園である。ヒグマをはじめさまざまな野生動物のすみかとなっている。



6 支笏洞爺

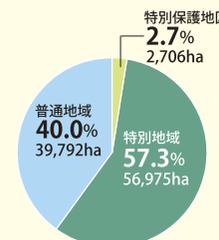
Shikotou-Toya

指定年：1949.5.16 面積：99,473ha

活発な活動を続ける火山とカルデラ湖の景観を基調とする公園で、自然性の高い森林を多く含んでいる。札幌大都市圏に近接し、アクセス性が良いため、身近なレクリエーションのフィールドとして多くの人々に親しまれている。

●来訪者数：1,462万人(2005年)

●保護の枠組み



●土地所有別



写真：阿部 豪、大友清志、大橋弘一 (Naturally)、大橋年治、久保敬親、小池正一、佐々木幸彦、佐野勝一、竹迫次光、橋 智行、津幡孝行、浜頭孝一、百武 堯、堀川恵子、森本夏彦、山田良道、吉江和幸、支笏湖フォトファンクラブ、支笏湖温泉旅館組合、(財)自然公園財団、(社)定山溪観光協会、(社)洞爺湖温泉観光協会、ニセコ町、(社)登別観光協会、(株)北海道アート社、北海道映像記録(株)